

「穴」のある風景構成法と風景描画法との比較検討

—構成型と構成プロセスにおける心的イメージに着目して—

18002PCM 小田 晃平

I. 問題と目的

風景構成法(以下, LMT)は投映法の一つであり, 「投映的」な側面の強い PF スタディやロールシャッハテストと異なり, 各アイテムを機能的に関連させていく「構成的」な過程が強く要求される技法である。高石(1996)は, 「構成型」という視点から構成度を7段階に分類した。構成型からは主に自我の「空間認知機能の主体」について把握することが可能となり, 構成型の段階と自我関与の在り方について把握するための指標として大いに有効である。しかし, 川崎(2018)では, 高石(1996)の研究が優れていたがゆえに, その後多くの研究がこの「構成型」の分類を参照枠としており, 構成型がⅦ型に至らないものは低いレベルにあるとみなされがちであることが指摘されている。構成型は全体の統合度について把握することが可能であるが, 主に大景群の全体像について着目したものであるため, 大景群の細部の描かれ方や中・小景群の配置の様相について把握することは困難となる。そこで, 皆藤(1994)の提唱した「構成プロセス」の視点を加えることで, 構成の在り方についてさらに詳細に検討できると考えられる。

武藤(2002)は, 構成プロセスにおける中・近景群におけるアイテムの選択のその都度に, 指向性の変化とその意味を読み取っていくことの意義について指摘している。また, 後藤(1996)では, 大景群のアイテムに比べ, 中・小景群のアイテムは, 自分を含めた人間像や対人関係をより投映しやすいことが指摘されている。また, 本研究では, 高橋(2016)の考案した「穴」のあるLMT(以下LMT-Hole)を実施する。高橋(2016)は, シンタグマティックな選択過程が優位であるLMTに穴のアイテムを付け加えることにより, パラダイグマティックな側面を把握することが

可能となると述べている。また, 穴には様々な意味が内包されており, 肯定的イメージや否定的なイメージなど, 様々なイメージが反映されやすいことが想定される。

LMTは検査者の指示通りにアイテムを順番に描いていく所に特殊性があり, アイテムの順番が決定していることが構成の在り方や, 構成を通して表れる被検査者の心的なメッセージ性にどのような意味をもたらすかについて検討をした研究は殆ど存在しない。特に大景群と中・小景群のアイテムの両視点からの詳細な検討についてはなされていない。したがって, LMT-Holeと, アイテムの選択順序が自由である「風景描画法」を実施し, 構成の在り方について比較検討することで, アイテムを順番に「構成」していくことの意義, 「穴」アイテムを加えることの意義について検討していく。

II. 方法

A 大学に所属する大学生・大学院生24名を対象とし(男性3名, 女性21名, 平均年齢21.4歳), 風景描画法, LMT-Holeの順で2種類の描画法を施行した。描画終了後, 2種類の描画についてのInquiryを実施した。

III. 結果

1. 統計的な側面からの結果

構成型の差異, 風景の全体像が思い浮かんだ段階において顕著な差異は認められなかった。描きやすさについては, 風景描画法の方が描きやすい人が多い傾向にあった($\chi^2(1)=4.09, p<.10$)。風景描画法でのアイテム選択順序からは, 川と山の逆転, 家の出現の早さの2つの特徴が散見された。構成プロセスの観点からは, 大景群については, 「川の先端処理」の個人内差異が有意傾向となり($p<.10$), LMT-Holeの方が川の先端処理が良好となる傾向にあった。また, 「上枠と接する

川」の出現率の差異については表 1 のようになり、LMT-Hole において有意に高かった ($\chi^2(1)=5.779, p<.05$)。その他の川や道の処理や構成、橋の有無には有意差はみられなかった。中・小景群については、「人と道との関連」における出現率が、LMT-Hole において高い傾向にあった ($\chi^2(1)=4.148, p<.10$)。また、人の数は LMT-Hole において有意に多くなった ($\chi^2(2)=12.250, p<.01$)。人とその他のアイテムとの関連、穴の表現の差異については、有意差は認められなかった。

表 1 「上枠と接する川」の出現率の差異

	上枠と接する川 (人) (%)	その他の川 (人) (%)	
風景描画法	2(8.3)	22(91.7)	24(100.0)
LMT-Hole	9(37.5)	15(62.5)	24(100.0)
合計	11(22.9)	37(77.1)	48(100.0)

2.事例別結果

次に統計的結果を踏まえ、①「風景描画法の構成度が高い事例」、②「LMT-Hole の構成度が高い事例」、③「練習効果が際立った事例」、④「構成の差異はほぼ見られないがパラダイグマティックな変化が著しい事例」の 4 事例をピックアップし、より詳細な構成過程の検討をおこなった。①では、「上枠を接する川」が描かれたことにより、視点が一部鳥瞰図的になったことで構成の乱れが生じた。②では、風景描画法では構成よりもイメージが先行し、LMT-Hole では教示の段階で構成の意識が働きイメージが抑制されたことから、LMT-Hole の構成度が上昇した。③では、練習効果の影響から LMT-Hole の構成が良くなった。④では、穴の表現の差異が著しく、制限の少ない風景描画法では空いたスペースに巨大な穴が描かれ、よりメッセージ性の強い穴の存在が強調された。

IV. 考察

構成型については差異が生じず、遠近表現や立体感については個人の描き方の側面が大きく、一定の年齢や発達水準に達していることが関連していると考えられる。一方、構成プロセスの視点からは、いくつかの差異がみられた。「上枠に接

する川」は LMT-Hole で多く出現したが、次のアイテムを予測できない故の処理方法が関連しているのではないか。LMT-Hole では、「山から流れる川」など川と他のアイテムとの関連が想像し難いが、処理を良くしようとすることで枠と接触させたこと、次のアイテムが不明確なため、視点についての意識が風景描画法よりも低く、鳥瞰図的な視点に違和感を持たなかったことなどが考えられる。また、「上枠と接する川」を描いた後のアイテム対処方法より、自我強度や状況対処力を読み取ることが可能である。中・小景群については、LMT-Hole において人と道との関連が有意に多い傾向にあり、アイテムの順序におけるスペース配分が影響していると考えられる。また、人数の増加については、制限の強い LMT-Hole においてメッセージを強調するための手段であると思われる。穴の表現については、他のアイテムと比較しても豊富な表現の仕方が存在し、その分表現のされ方も多種多様となることが想定されるが、すでに他のアイテムが描かれた状態においては、LMT-Hole の方が制限が多く、自由に穴を表現することが困難であることが考えられる。したがって、高橋 (2016) で指摘されている穴の意義に加え、LMT-Hole では、限られた空間の中でメッセージ性の強い穴をいかにして配置し、どのようにイメージを穴に表現するか、という被検査者の側面が強く存在することが考えられ、アイテムの順序が決定している LMT に穴を付け加えることの意義があると考えられる。

LMT-Hole は、アイテムを描く順序が決定している分、先を予測できない制限された状況の中でどのようにアイテムを配置し、どのように心性を反映させるか、ということが強く求められ、風景描画法とは異なる側面を持ち合わせているといえる。したがって、シntagマティックな側面が優位な状況の中で 1 つ 1 つのアイテムを表現していく、というところに LMT-Hole の独自性があり、自我関与の強さと表現される描画からのメッセージ性を同時に把握することができるという点で、臨床現場で使用されることの意義を改めて認識することができる。